

日本の伝統的な布の新たな価値創造

-きものの布幅で行う衣服デザイン-

An Attempt to Create a New Value of Traditional Japanese Cloth : Fashion Designing with Materials in the Kimono Cloth Width

Bunka Fashion Graduate University
Kyoko Kubodera

文化ファッション大学院大学
久保寺 恭子

要旨：日本にはその土地の風土と人々の営みによって育まれてきた美しい伝統的な布が存在する。それらの布は主にきものを制作するために織られてきたものであるが、消費者のきもの離れが進み、産地の生産量は年々減少している。それに伴い事業者が高額商品へと軸足を移したことにより、きものは日常的には着ない「晴れの日」のものとなった。このような問題に対し、きものの着用を触発する取り組みも行われているが、抜本的な解決には至っていない。日本の伝統的な布をきもの以外に活用する試みや2015年に「SDGs（持続可能な開発目標）」が採択されてからは、きもののアップサイクルを理念とするブランドも見られるようになった。しかしながら、布幅が38cmであることのデザイン展開の難しさや着物独特の民族的な雰囲気が残る衣服、「晴れの日」に着用するためのドレスなど日常的に着用することが難しいところが課題である。そこで、本研究では日本の伝統的な布を日常的に着用するための新たなデザイン提案を行うことを目的とし、きものの布幅、すなわち38cmの布幅で作品制作を行なった。

1.緒言

何年か前のことであったが、一般社団法人日本ファッション・ウィーク推進機構の主催する Japan Creation に赴いた。その際、ある美しい古代布を見た。大変美しい生地であり、身に着けたらどんなに素敵であろうと申し伝えると、生地幅がこれだけしかないので、売り先が本当に限られてしまうとのことであった。加えて高価な生地であるため、需要なく広幅のものは制作できないという。古代布をはじめ、日本の伝統的な布は基本的にきものを制作するために織られてきた生地である。

そのため生地の幅は鯨尺1尺分、つまり38cm程しかない。一般的な日本人女性の標準体型とされる9ARの洋服の型紙を配置してみれば、その幅で洋服を作ることが難しいということは容易にわかるだろう。きものを着る機会の減少に伴う呉服業界の冷え込み、後継者問題などから、これらの布の存続は厳しい局面にある。

このような問題に対して、きものの着用率を上げるための数多くのイベントが開催されている。また、ストールや小物、インテリア用品などきもの以外の製品にこれらの布を活用する取り組みも行われている¹。同時にきものは古くからリユースされてきたものである。江戸時代にはすでにリ

提出年月日：2021年1月15日

受理年月日：2021年2月28日

サイクルショップも存在し、きものだけでなく端切れや糸の買取りもあった。また、長方形の布で構成されているので、自身で縫いを解いて子供用のきものを仕立てたり、草履の鼻緒、赤子のオムツ、雑巾として活用した。最終的には燃やした灰を肥料や染料に使用するため、買い取り業者までいたというから驚きである²。2015年9月、国連サミットにおいて「SDGs(持続可能な開発目標)」が採択された。石油産業に次いで2番目に環境汚染を引き起こしているというファッション産業も環境に負荷の少ない製品を生産するなど、その責任が求められている。このような観点から、近年では着物のアップサイクルを理念としたブランドも見られるようになった。

しかしながら、日本の伝統的な布の生産量は減少の一途を辿っており、日常的に触れられる機会も少ない。また、きものをアップサイクルした服に関してもきもの独特の民族的な雰囲気が残っており、日常的に着用することが難しいところが課題である。そこで本研究では日本の伝統的な布を日常的に活用する新たなデザイン提案を行うことを目的とする。

以下、第2章では、近年における呉服業界の市場規模や産地の生産量の推移など、伝統的な布にまつわる現状について述べる。次に第3章では実際に38cmの布幅で制作した作品に関してその意図と過程を解説する。第4章では本研究の考察と今後の課題についてまとめる。

2. 日本の伝統的な布にまつわる現状

2-1. 伝統的な布ときもの

日本の伝統的な布はその土地の風土と人々の営みによって育まれてきた。故に染織の材料や技法にはその土地の特性が顕著に現れる。日本各地には、代表的な産地だけでもこれだけ多くの場所が存在し、それぞれ特色を持った美しい布が存在す

る(図1)。これらの布の起源はそれぞれであるが、南北に長い日本列島の様々な区分の気候に順応しながら、日本人の衣服として活用され、日々の生活を豊かにしてきた。

古来より、一人で織られる伝統的な日本の布は左右の手で緯糸の受け渡しをするため、布幅は人の肩幅よりも狭いものとなった。貫頭衣もこの布を二枚繋ぎ合わせたもので構成されており、着物もその派生で誕生したものである³。町人文化が花開いた江戸時代の後半には現在のきものの原形とされる小袖が成立し、女性たちは身分や階層の違いによってそれぞれの美意識を小袖に反映した。特にこの時代は生地や技法の選択、意匠形式のバリエーションが増え、様々な流行が誕生した⁴。



図1 出典：一般社団法人全日本着物振興会編『きもののたのしみ改訂版』第7版、世界文化社、2019、pp. 54-55

2-2. 呉服業界の市場規模

第二次世界大戦前まではきものは日常的に着用されており、素材も綿、麻、人絹など大量に供給されていた。戦後、急激な洋装化によりきものは徐々に日常着ではなくなっていく。消費者のきもの離れが進み、事業者が高額商品に軸を移したことで、さらに産地の生産量も減少していった。呉服業界の市場規模の推移を見ていくと、1981年のピーク時には1兆8000億円規模に上ったが、現

在は 2605 億円（2019 年）とおよそ 7 分の 1 に落ち込んでいる（図 2）。また、総務省統計局による和服に関する支出（2020 年 2 月）によると「和服」の一世帯あたりの年間支出金額も年々減少している（図 3）。一方で、「被服賃借料」の一世帯あたりの年間支出金額は増加傾向にあり（図 4）、きものは成人式や結婚式などのいわゆる「晴れの日」と呼ばれる特別な日のものとなり、日常生活から縁遠いものとなったことが伺える。

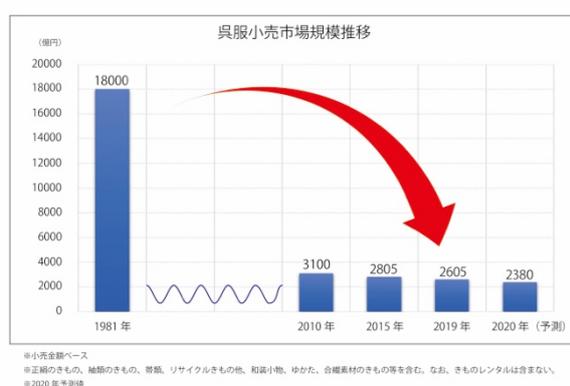


図 2 株式会社矢野経済研究所『きもの産業年鑑 2020 年版』より作成

このような状況に対し、経済産業省は 2015 年に「和装振興研究会（現在の和装振興協議会）」を発足し、潜在市場開拓のための新たなビジネスモデルの構築や、きものの着用機会の向上、きものを活用した地域振興、国内外への着物の発信などを提案している⁵。実際に「きもの日」や「呉服の日」を制定し、この日に目掛けて着物の振興イベントを開催する事業者もあり、きものに触れる機会を増やす取り組みが数多く行われている。また、きものの伝統的技術や技法を次世代に継承し、和装（きもの）文化を継続、発展させるため、「和装（きもの）文化のユネスコ無形文化遺産登録」に向けた取組を積極的に行うなど、文部科学省・文化庁とも協同で、国をあげた取り組みが行われている⁶。



図 3 出典：総務省統計局『家計調査通信第 552 号(2020 年 2 月 15 日発行)』



図 4 出典：同上

しかしながら、呉服業界の事業規模は年々縮小しており、同時に伝統的な布の産地の生産量も減少している。加えて、2020 年は新型コロナウイルスの感染拡大が深刻化し、きものの需要の高い「晴れの日」の場が失われ、呉服業界は大打撃を受けている⁷。

2-3. 日本の伝統的な布のきもの以外の活用

呉服市場の縮小を背景に、伝統的な布をきもの以外に活用する取り組みも行われている。例えば、ランプシェードやクッションなどのインテリア用品への使用、傘やバック、小物として活用するなど様々な展開を見せている。また、元禄元年（1688 年）創業の京都で西陣織を営む「株式会社 細尾」では、2010 年に 150cm 幅の西陣織を織ることができる織機を独自に開発した。基本的に西陣織の幅は 32cm、その壁を超えたことで細尾の西陣織は世界のラグジュアリーブランドの店舗やホテルの内装に採用され、事業を拡大している⁸。

また、きものはリユースするための潜在能力が非常に高い。長方形の布で構成されていることも要因の一つだが、「布のちから」つまり染織の意匠の豊かさが作り手の創作意欲を湧かせるのだろう。それ故、これまでにきものを洋服や小物にリメイクする解説本は数多く出版されている。また、きものの布を洋服にリサイクルする研究は今日まで様々な視点で行われてきた。例えば、「古着物を利用した現代服の制作」(高木、2015)においては、古きものを解体し、現代的な洋服にする研究が行われている⁹。

2015年に国連サミットにおいて「SDGs(持続可能な開発目標)」が採択されてから、きもののアップサイクルを理念としたブランドも見られるようになった。例えば、2019年に設立した京都の「株式会社 季縁」は「持続・継承」をコンセプトに、古き良き日本の美意識を継承すると共に、使われなくなった着物を再利用し現代に即した着物ドレスの提案をしている¹⁰。公式サイトではSDGsの取り組みも謳っており、衣服の過剰生産を懸念しきものの再利用により、廃棄物の発生を削減することを掲げている。

このように伝統的な布をきもの以外に活用したり、きもの自体をアップサイクルするなど呉服市場以外での需要を広げる試みは様々な形で行われている。しかしながら、その汎用性は未だ低い。布幅38cmという制限の中できもの以外のものをデザインするのは難しく、布の特性によっては衣服以外における活用が見出しにくい場合もある。きものをリメイクまたはアップサイクルした服に関しても、きもの独特の民族的な雰囲気が残っている、または、「晴れの日」に着用するようなドレスの提案であるといった理由から、日常的に着用することが難しいところが課題である。また、上述した高木の研究においては、民族的な要素は良い塩梅でデザインに昇華されており、現代的な

研究作品に仕上がっているが、着物の柄に合わせて型紙を配置しており、余り布が多く見られる。また、別布との組み合わせを試みるなどデザイン性により重きをおいている事が伺える。本研究の制作作品においては「デザイン性があると同時に、日常的に着用でき、そして出来るだけ余り布を出さない」ということを加味して行うこととする。

3. 作品制作

前章で述べた現状とその課題を踏まえ、作品制作にあたり以下、3つのルールを設けた。日本の伝統的な布を日常的に着用するための新たなデザイン提案を行うと同時に、38cmの布幅で制作できるデザインを増やすことで、使わなくなったきものを日常着へ活用する機会を提供したい。

- (1) 現代生活において日常的に着用できるデザインであること。
- (2) 生地本来の美しさを生かすため、また再利用について考慮し出来るだけ裁断しないこと。
- (3) 付属などを省いたメインとなる部分は基本的に幅38cmの生地で構成すること。

生地については仮縫い用のシーチングを幅38cmに処理したものを使用した。以下、制作した2点のアイテムについて解説する。

3-1. Darari Skirt

3-1-1. デザインの意図

本研究の発端は、日本の伝統的な布に対する感動によりはじまったことは冒頭に述べたとおりである。これらの「布のちから」を最大限に引き出すために、シンプルな形でありながら少し日本らしさを感じさせるデザインに仕上げたいという意図があった。そこで京都の舞妓の帯結びである「だらり帯」に着目した。「だらり帯」はその名の通り、

後ろで結んで両端をだらりと長く垂れ下げる結び方である。舞妓が舞をする際、その後ろに垂らした帯がふわりと動き、柔らかさや華やかさを演出できるのが特徴である。この「だらり帯」の雰囲気スカートの後ろ部分に落とし込んだ。一方、前部分はシンプルで少しタイトな巻きスカートにした。巻きスカートは右前スカートが外側に来るのが常であるが、今回はあえてきもの着方に基づいて逆のデザインにした。前から見るとシンプルなスカートであるが、横から見ると腰当をつけたようなシルエットになっており、裾にめがけて細くなっていくラインが特徴である。本来「だらり帯」は帯の両端が垂れているものである。今回、制作過程で両サイドに垂れるものも制作してみたが、片側のみの左右非対称のデザインの方が、全体のバランスが美しいと判断し、このような形となった。(図5)

3-1-2. パターンと仕様

このスカートは3枚の長方形の布で構成されている。前の部分は巻きスカートのように重なりを持たせ、後ろスカートはウエストで終わることなくそのまま直上したパターンになっている。両方の前スカートのサイド端にはベルトと親子カンが



図5 Darari Skirt (左から前、右横、左横、後ろ)

付いており、それらを留めることで後ろスカートにギャザーが寄り、ウエストから直上した後ろスカートがふわりと「だらり帯」のように返って来る仕組みである(図6)。また、右前スカートと後ろスカートのつなぎ目はあえて耳の部分を利用しそのまま付き合わせにして縫製している。パターンは全て長方形の形でできており、見返しとベルトなどの付属以外は幅38cmの布をそのまま使用している。次に紹介するトップスのパターンとマーキングした際にできる余り布でベルトに通せるループ付きのポケットを制作した。(図7)

3-2. Obi Tops

3-2-1. デザインの意図

Darari Skirtと同様に生地本来の美しさを生かしつつ、少し日本らしさを感じさせるデザインにしようという意図した。スカートがシンプルな分、トップスは少し華やかさを演出し、そのまま1枚でDarari Skirtとセットアップで着用すればドレスのようになり、長袖のインナーの上に重ねると、日常的にアクセサリ感覚として使用できるものを目指した。また、上半身は下半身よりも体の構造が複雑なため、胸の膨らみのためにダーツを取ったり、袖ぐりの曲線を描くとどうしても余り布が



図6 後ろの仕様

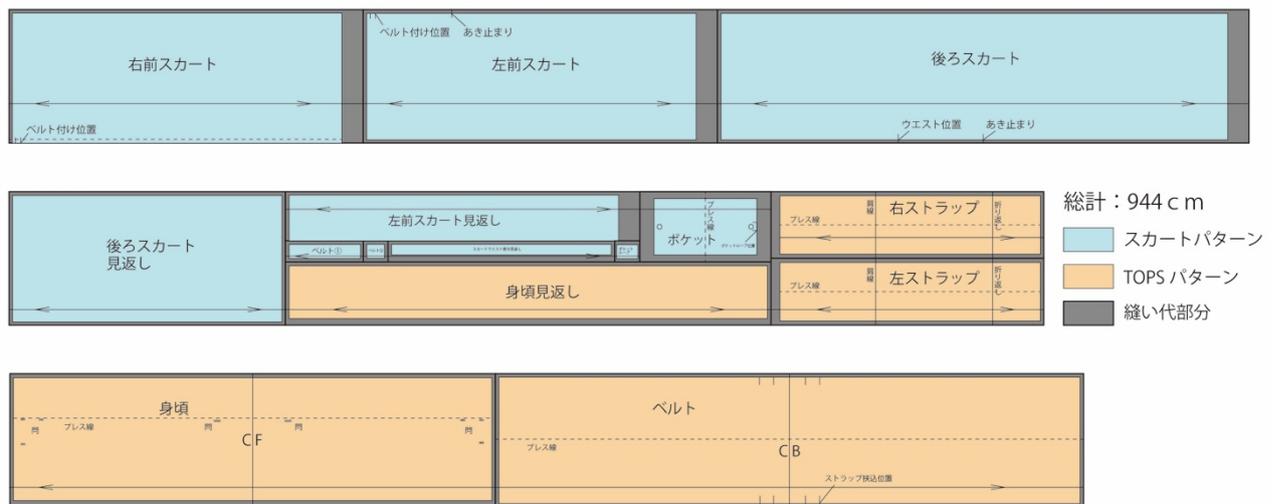


図 7 Darari Skirt（水色部分）と Obi Tops（オレンジ部分）のパターン

発生してしまう。そのため、帯のような土台ベルトにゆったりとドレープ感のある布を袖のようにつけることで、その点を解消した。ディティールはきものを締める帯の結びや振袖のゆらゆらと揺れる振り、後ろ中心のデザインは衣紋抜きから着想を得た。(図 8)

3-2-1. パターンと仕様

このトップスはスカートと同様、全て長方形の布で構成されている。まず、ベルトのような土台に左右のストラップが付いている。ストラップは前側で折り返して縫い止めてあり、その穴に後ろからまわって来たベルトが入るようになっている。

また、ベルトは前で結び体にフィットさせ、この土台に身頃部分が縫い止められた形で制作されている。(図 9) 身頃部分は見返しをつけ、留めつけた位置から外側に衿のように返ってくる仕様で、たっぷりと布を使いドレープ感を持たせた。

用尺：944cm（トップスとスカートの合計）

付属：親子カン 1 個、スナップボタン 1 個（スカートにのみ使用）

生地ロス率：0%



図 8 Obi Tops (左から前、横、後ろ)



図9 Obi Tops 内部構造

4. 結語

本研究は、まずきものために織られた日本の伝統的な布が消費者のきもの離れにより、生産量が減少し、厳しい局面にあるという現状を調査した。また、日本の伝統的な布をきもの以外に活用する試みも行なわれているが、布幅が38cmであることの難しさやきもの独特の民族的な雰囲気が残っている、また、「晴れの日」に着用するようなドレスで日常的に着用することが難しいなどといった課題を見つけた。そこで、日本の伝統的な布を日常的に着用するための新たなデザイン提案を行うこととした。同時に、38cmの布幅で制作できるデザインを増やすことで、使わなくなったきものを日常着へ活用する機会を増やすという目的の下、作

品制作を行なった。38cmの布を用意しトップスとスカートの2点を制作した。制作にあたり、現状の課題点を踏まえ、現代生活において日常的に着用できるデザインであることや生地本来の美しさを生かすため、また再利用について考慮し出来るだけ裁断しないことなどをルールとして行なった。トップス、スカート共に日本らしさを加味しつつも、日常的に着用できる現代的な衣服に仕上がった。また、余り布を一切出すことなく制作できたことは、この研究において意義深いことであった。ただし、仮縫い用のシーチングで制作を行なったため、実際の布で制作した場合、それぞれの布の特性によりシルエットが変わる可能性がある。また、柄がある生地の場合は柄組みを考える必要性があり、その際トップスにおける布目に逆らった生地使いでは難しい場合がある。今後、この課題を検証するために実際の布での制作を試みたい。

また、これからも日本の伝統的な布の現状を把握するため、加えてデザインを考える上で、日本の産地に足を運び、その土地の風土や気候とそこにおける生産者の方々の暮らしまでを智覚する機会を作りたい。そして日本の伝統的な布の有用性を高めるためのデザイン展開を続けていきたい。



図10 作品全体図

参考文献

1. 経済産業省「和装振興研究会報告書 平成27年6月16日」 p. 38、
(https://www.meti.go.jp/committee/kenkyukai/seizou/wasou_shinkou/pdf/report01_01_00.pdf 閲覧日：2021年1月3日)
2. 石川英輔『大江戸リサイクル事情』講談社文庫、1997、p319
3. 一般社団法人全日本着物振興会編『きものたのしみ改訂版』第7版、世界文化社、2019、pp. 120-122
4. 同上、pp. 126-128
増田美子『日本服飾史』東京堂出版、2013、pp. 121-133
5. 経済産業省 「和装振興協議会」
(https://www.meti.go.jp/shingikai/mono_info_service/waso_kyogikai/index.html 閲覧日：2021年1月10日)
6. 経済産業省 「第9回和装振興協議会」
(https://www.meti.go.jp/shingikai/mono_info_service/waso_kyogikai/009.html 閲覧日：2021年1月10日)
7. 東洋オンライン「コロナ禍で「着物」が苦境、バイセル急伸の裏側」
(<https://toyokeizai.net/articles/-/402215> 閲覧日：2021年1月11日)
8. 株式会社細尾 (<https://www.hosoo.co.jp/> 閲覧日：2021年1月10日)
9. 高木幸子「古着物を利用した現代服の制作」『服飾文化学会誌〈作品編〉』、2015、(Vol. 8)、pp30-33
高木幸子「古着物を利用した現代服の制作：黒留袖」『服飾文化学会誌〈作品編〉』、2016、(Vol. 9)、pp35-38
高木幸子「古着物を利用した現代服の制作：絹」『服飾文化学会誌〈作品編〉』、2017、(Vol. 10)、pp45-48
10. 株式会社 季縁 (<https://kimonokien.jp/> 閲覧日：2021年1月10日)